

医療放射線

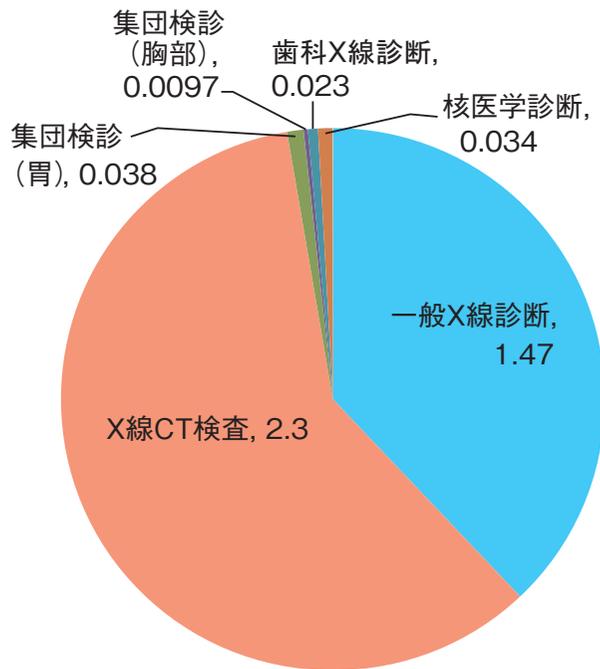
あなたは、胸部エックス線撮影や、バリウムを飲んで行う胃部エックス線撮影、あるいは歯医者さんでレントゲン撮影を経験したことがありますか。

これらは、いずれも人体の各臓器や筋肉、骨や歯に対するエックス線の透過率の違いを利用して体内の写真を取り、治療に役立てるものです。

最近では、エックス線をあらゆる角度から照射し、透過率の違いをコンピュータで解析して、目的の臓器などの映像をブラウン管に映し出せるようにしたものがあります。これをエックス線CT検査、通称シーティースキャンといい、脳内出血などの脳の診断に威力を発揮しています。

医療被ばくには、エックス線撮影の他に、放射性同位元素を投与する肝臓検査やコバルト-60からのガンマ線をつかったガン治療などがあります。図は検査や診断で受ける放射線の量の国民一人当たりの推定値です。X線診断における1検査当たりの平均実効線量は、0.07mSvと報告されています。

(なお、図中のX線CT検査の値のみ、1995年当時の0.8から2001年での2.3(新版生活環境放射線に記載されている値)に変更してあります。)



病院の検査や診断で受ける国民一人当たりの年間実効線量 (mSv/年)

[丸山隆司編：生活と放射線、放医研環境セミナーシリーズ22、1995より]